

東洋紡株式会社 2022 年度 第 2 四半期決算説明会 質疑応答要旨

日時：2022 年 11 月 11 日（金） 10:30～11:30

場所：WEB 形式

説明者：代表取締役社長 竹内 郁夫

本資料中の将来の業績見通し等に関する記述は、現時点における情報に基づいており、当社として保証するものではありません。実際の業績等は、さまざまな要因により異なる可能性があります。

Q：増減分析の「その他」が増えているが、その内容は？今後の見通しは？

A：試験費、医薬の FDA 対応費用、および基盤整備・強化に関する費用が増えている。今後については、基盤整備・強化を継続するため、人件費は減少しないが、今期は一時的な費用も含まれており、次年度の「その他」は、今年度より減少する予定。

Q：原油価格の上昇ペースは緩んできているが、交易条件が改善していない理由は？

A：原油価格は安定してきているが、石炭の価格が跳ね上がっている。当社は、一定量のエネルギーを石炭に依存しており、その影響が出ている。下期は、その影響がより大きくなる見通し。

Q：2Q 累計の“コスモシャイン SRF”の状況は？下期の見通しは？シェアは？

A：“コスモシャイン SRF”の 2Q 累計の前年同期比は、約 5%減収。下期も、前年同期比で、約 5%減収の見通し。パネルの大画面化が進む中、弊社の PET フィルムの強みはお客さまに認識いただいており、シェアは落ちていないと見ている。

Q：2Q 累計のセラミックコンデンサ用離型フィルムの状況は？通期の見通しは？

A：セラミックコンデンサ用離型フィルムの 2Q 累計の前年同期比は、約 10%減収。汎用～ミドル用途の今後は、自動車の生産台数の回復次第。ハイエンドは、需要が弱くなっているわけではないが、中国ロックダウンで、スマホの生産台数が落ち込んでいる影響を受けている。通期の見通しは、21 年度後半から市況が悪化していることも加味して、年度比較では約 5%増収の見通し。

Q：フィルム・機能マテリアルの下期の見通しについて。2Q が 7 億円だったことを踏まえると、下期は強気に見えるがその根拠は？

A：2Q から 3Q にかけては、包装用フィルム、工業用フィルム、機能マテリアルの全てにおいて、価格転嫁が実現していくので、利益は改善する見通し。“コスモシャイン SRF”については、数量回復を 4Q で織り込んでいる。

Q：犬山工場の包装用フィルムの新ラインの状況は？

A：犬山工場の包装用ポリプロピレンフィルムの新ラインは、7 月から稼働している。商業生産は 23 年 1 月頃の予定。

Q：包装用フィルムは、円安はマイナス要因か？

A：包装用フィルムの一部の事業について、海外で作ったものをドルで仕入れており、その部分はマイナス。

Q：タイのエアバッグ用原糸工場の状況は？

A：タイのエアバッグ用原糸工場は、10月に稼働開始。認証取得を進め、23年半ばの商業生産を目指す。

Q：エアバッグ用基布の下期の見通しは？

A：下期は、引き続き価格転嫁は進めるが、原料価格高騰、為替の両方の要因で、スプレッドの大きな改善は難しい見込み。次年度以降、価格転嫁が進むことで、赤字幅は縮小する見通し。

Q：今期のエンプラの業績は悪い印象だが、その理由は原材料が高騰していることだけか？

A：価格転嫁の遅れもあるが、主要素材だけでなく、添加剤など副原料の高騰、ユーティリティのコストアップ、海外での加工費アップ等が要因。品質保証体制の強化を目的とした、人員増強による費用増も要因の一つ。

Q：PCR検査用試薬の見通しは？第8波は盛り込んでいるか？

A：PCR検査用試薬は、上期に対し下期は3分の1に減少の見込み。これは、第8波を見込んだ数字ではない。

Q：営業外費用が多い会社のように見えるが、その理由は？

A：営業外損失には、操業度を落とした事業の操業度損失や為替差損等を計上している。昨年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により一時的に営業外費用に操業度損を計上する場面があったが、今期は、同損失は無くなっている。また過年度の敦賀事業所での火災以降、対応する損失を営業外損失に計上してきたが、今年度は少なくなっている。為替差損益については、22年度2Qは円安が進行し営業外収益に相応の金額を計上している。

以上